

浜松中納言物語の題名

On the Title of Hamamatsu Chūnagon Monogatari

中西健治

はじめに

浜松中納言物語の題名について従来論考をなぞりながら、なおこれらに付加すべきながしかないか、模索してみようとするのが本稿の意図である。

昭和三十九年五月、日本古典文学大系の中の一冊として浜松が加えられて刊行された。その「解説」の冒頭は次のような文章で始まっている。

浜松中納言物語という名は、今の人には極めて耳遠い。そればかりではなく、あの文運の盛んであった徳川時代においてさえ、この物語の刊本はわずかに丹鶴叢書に属する一本に過ぎなかった。つまり、この物語は何百年もの間、少なくとも一般世間からは捨てさられていたのである。

(一三五頁)

この「極めて耳遠い」物語の研究に次々と光を当てて闡明に努めてこられたのが、右の文の執筆者であり、古典大系の校注を完成された松尾聰氏であった。氏によって不完全であった物語の基本的問題の多くが解明され、平安朝物語の一つとしての読解が飛躍的に進歩したのである。本稿で取り上げようとする題名に関する考察にしても、「書誌学」(八一・昭和十二年一月)に「浜松中納言物語題名考」(『平安時代物語論考増補版』所収・これをいま(A)とする)と題する論文を発表され、その中で基本的見解のほとんどについて言及し論証されたのであった。以後の諸論は松尾氏の見解に幾分かの補足や再確認にとどまるもので、氏の説は今日にまで大筋で認められているといえる。本稿もその点では屋上屋を架すものであることを自認しつつ、諸説整理の上に立って、あえて若干の補足を重ねておくものである。以下、とくに題名について言及された論文や解説のうち、本稿で取り上げてみようとする主なものを掲げてみるとつぎのようになる。

- (B) 三上貫之氏「浜松中納言物語私考——題名と作者について」(『国文学論究』第五冊・昭和十二年六月)
- (C) 宮下清計氏『新註国文学叢書 浜松中納言物語』(解説・「四 題名」)(昭和二十六年一月)
- (D) 石川徹氏『古代小説史稿——源氏物語と其前後——』(増訂版)(第十九章 浜松中納言物語概説)補注(平成八年五月)
- (E) 池田利夫氏『新編日本古典文学全集 浜松中納言物語』(解説・「二 書名について」)(平成十三年四月)

(二) 従来 of 諸説の吟味

(A) の松尾聰氏の見解はきわめて厳密で実証的である。要点のみ摘記すると次のとおり。

- ① 題名は物語卷一の中納言の歌「ひのもとのみつの浜松こよひこそ我を恋ふらし夢に見えつれ」によること。
- ② この歌は万葉集卷一の山上憶良の歌、及び卷十五の「ぬばたまの」に依っている。
- ③ 原題は「みつの浜松」であり、浜松中納言物語は江戸時代以降の名称である。
- ④ 「みつの浜松」は物語の主人公をさしてはいない。
- ⑤ 主人公でない人物をさす名称が題名になったかは物語の内容と深く関連する。

松尾聰氏とはほぼ同じ頃に発表された三上氏の論(B)はおおよそ松尾氏説と重なる部分も多く、研究史的にもあまり注目されていない。鈴木弘道先生の『平安末期物語研究史 寝覚編 浜松編』にもわずかに卷末・第三章「寝覚物語・浜松中納言物語研究史年表」にしか取り上げられず、また『新註』(C)のも同様な扱いしかなされていない。三上論文が掲載された「国文学論究」の昭和十二年二月には、研究史上、特記される白田甚五郎氏の論文「浅野図書館本浜松中納言物語末巻の紹介に併せて其作者に対する疑ひなどを述ぶ」が掲載されており、同じ「国文学論究」としては、むしろこの方に目が注がれているようである。この後に同じ物語を対象として掲載された三上氏の論は白田氏とは異なった観点から、なぜに「みつの浜松」という語が好まれたかという点を焦点として論述されたものであった。それは平安朝期における万葉集の愛好や海外交通への憧憬によって、とりわけ題名の根拠となった憶良の歌と万葉集歌との緊密性が然らしめたものとの判断によって考察をすすめられたのであった。すなわち、「みつの浜松」及びこれに類する「みつの浜辺」「みつの浜」「みつの松原」などの歌を掲出し、そこに籠められた解纜の地としての「みつの浜」への思いの存在を確認し、同時に人々の別れに関わる地名でもあるとして次のように述べられた。

待ち恋ふ心と大陸へ舟出の解纜地としての三津の浜の印象は、単に万葉人の心を支配したのみならず、遙かに下

つて、此浜松中納言物語の作者に「日の本のみつの浜松こよひこそ云々」の歌を作らしめてゐるのである。

さらに「夢に見えつれ」の語句にも万葉集との関連があると説き、「みつの浜松」と「夢に見えつれ」の両句を有する浜松中納言物語の歌は時代的に關心の高い歌であったがゆえに物語の題名としてふさわしいものであったと論じられたのである。万葉集との関連は憶良の歌との関わりのあることで注目されるのは当然であるが、三上氏はこれについて多くの資料を用いることよつて強調されたのであった。ただ、「夢に見えつれ」についてはわずかに万葉集の五首をかかげて何らの関わりをも考察されることなく補足的に述べられたのはやや不満の残るものではあつた。

浜松研究史上、画期的な業績の一つである注釈を完成されたのが宮下清計氏の「新註」であつた。その巻頭九十一頁に互る「解説」はさながら一編の論文の体をなしているものである。そのなかで題名に関して宮下清計氏は、「日の本のみつの浜松」が暗に左大将の大君を指しているはずで、この人物が主人公ではないのに物語の題名となつている理由について次の三点をあげられた。

- 中納言と大君の恋愛が中心であり、大君の人形としての唐后、さらに吉野姫への恋愛として発展する物語である。よつて作者のねらう構想の特異性を醸し出す重要な位置を占める人物だから。
- 当時の文壇、読書界に万葉・古今等の影響が強くあり、「みつの浜松」の語の方が余韻縹渺たるものがあり、文学的効果が高いから。
- 万葉的世界への思慕が大陸文化を通しての未知の国、唐土への憧憬をかりたてていたから。

これらはすでに松尾聰、三上貫之両氏の論じられたところではあったが、宮下清計氏の視点から眺めてみると、なお豊かな理解が得られるのである。つまり、宮下氏は、浜松巻一の「日の本の……」の中納言の歌は今日の我々が考える以上に高く評価されていて、この物語に対する共感と諧意とが当時の人々の心に深く訴えるものがあつたと述べ、「おそらくこの物語の命名者は、この題名に一抹の得意と優越を感じ、文学的香気高きものとして自負したにちがひない。かうした一見遊戯的にさへ見える題名の付け方の上にも当時の人々の繊細な感覚が見られるのではあるまいか。」(一七頁)と説いておられる。このことは三上、松尾両氏の説と基本的にはかわらないものの、豊かな当代の文芸思潮を援用して論じておられる点において視野の広がりを感じるものである。

(A)ではこの点に関しては「主人公中納言の悲恋の生涯の出発を切らせた意味に於いて、この物語の前半で、かなり作者によつて強調された女性である。従つて、この女性に対する中納言の悲恋の歌に現れたこの女性の影『みつゝの浜松』が翻つてこの物語の題名とされるといふことは、極めて自然であらうと考へる。」(四三七頁)と述べられていて、(C)と並べてみると(A)の見解が極めて禁欲的論調に見えてくる。ややならしてみれば、(A)(B)をひつくるめて総合的に述べたのが(C)ということになるう。

(C)のなかで宮下氏が石川氏の私信ということで触れられているのが(D)である。もつとも大要は従来の見解を基本とはするものの、(D)は古今集との関係を付加するものであつた。石川氏は次のように述べられる。「みつゝの浜松」は従来から言われているように万葉集歌(巻一、憶良・巻十五)から出たものであろうし、それが大将の姫君を指すことも同じ。ただ、「この姫君が尼になるといふ構想にヒントを与へたのは、古今集雑下の贈答歌(省略：中西)の二首であつたであらう。」(四九〇・四九一頁)という。このことは石川氏が初めて提出されたものであつたので、これを吟味する必要があるだろう。

古今集卷十八・雑下の贈答歌二首（九七三・九七四）はいわゆる葦刈伝説に関わる歌である。

題しらず

我を君難波の浦に有りしかばうきめをみつのあまとなりにき

この歌は、ある人、昔、男ありける女の、男とはずなりにければ、難波なる三津の寺にまかりて、尼になりて、よみて男につかはせりけるとなむいへる

返し

難波濁うらむべきまもおもほえずいづこをみつの尼とかはなる

この二首について片桐洋一氏は『古今和歌集全評釈（下）』において次のように述べておられる。

歌が詠まれた事情の説明は前歌の左注にしかなく、詳しいことはわからないが、『大和物語』第一四八段に見られるように、当時葦が生い茂った低湿地であった難波と都とのギャップが物語の前提として存在しているのである。

（三五五頁）

男が通って来なくなつたことで女は悲嘆のあまり尼となつてしまい、男に恨みの歌をよこしたというのであつて、いかにも浜松の趣向と通うところがある。浜松では中納言が唐土に出発してしまい恋人である女君（大君）が出家してしまうという人物の動静の類似に加えて、片桐氏も指摘されるように、京に住む人にとって海辺の湿地は異郷という十分な心理的空間的隔たりがあり、浜松での日本と唐土のそれにも通うのである。石川氏はこの二首の「みつのあ

「ま」の傍らにとくに圈点を施しておられることから、「みつのあま」は「みつの浜松」という語句をも誘導したのではないかと考えておられることがわかる。いずれにせよ、石川氏があげられた古今集の歌が浜松の構想に何らかの影響を与えていないとは言えないようである。

これまでの諸見解が近年までのほぼ定説を形成していたといえる。「新註」「大系」のあと、しばらくの時間をおいて池田利夫氏の『全集』が平成十三年春に刊行された。『全集』の解説も題名について従来の見解を承けつつ慎重かつ簡潔に述べられている。つまり、「みつの浜松」が原題であること、万葉集の憶良の歌がもとになっていることを確認したうえで、憶良の歌を中心に説明を付加された。いまそれらをまとめると次のとおりである。

- ① 「これは数ある『万葉集』歌の中の、国外で詠まれた唯一の歌」であること。
- ② 「詞書の『大唐』は『もろこし』、『本郷』は『やまと』とも『くに』とも訓まれ」ること。
- ③ 「歌の『はやくやまとへ』は、西本願寺本では『はやひのもとへ』と訓む」こと。
- ④ 「『御津の浜松』という命名が、果たして作者自身にまで遡りうるのかどうかは詳かではないが、この成句は、日本と唐土との対比に主眼が置かれている」こと。
- ⑤ 「帰国してなお中納言が唐后を憶い続ける姿を写し出している書名であるとも言える」こと。
- ⑥ 実材御母集や風葉和歌集の表記からこの書名はながく続かなかった。

この六項目のうち、①～③や⑥は従来の見解に異なった角度から加えられた説明で、④⑤は池田利夫氏の見解とみられるものである。「新註」の説に「大系」の見解を加え、さらにこの池田利夫氏の解説を併せ見るかぎり、題名につ

いとは何ら余すところなく言及され、言い残されていることはないかのようには思える。もちろんこれですべて十全なのではあるが、題名の根源たる中納言の歌はどのような状況のもとで、いかなる修辭法を伴って詠まれたものなのか、また、どのように扱われてきたのか、という歌の周辺事情にまで視野を拡大すれば、なお言及しておくべき事柄が若干はありそうに思えてくる。

(二) 大君の歌について

浜松の題名は物語卷一の次の歌にあることは先行諸論に異論のないところである。

日の本の御津の浜松こよひこそわれを恋ふらし夢に見えつれ

右の歌は唐土にある中納言の夢枕に日本にいる大君が立ち、中納言に恨み言を含んだ歌を詠みかけたことに対する中納言の返歌として位置づけられている。大君の歌とはつぎのようにある。

たれにより涙の海に身を沈めしほるるあまとなりぬとか知る

中納言はこの歌にこめられた深刻な意味の核心については十分な理解に至らず、ただ、中納言恋しさで涙の海に身を沈めている悔しさ、恋しさを訴えたものだけ受けとめたのであった。『全集』は「大君は中納言の渡唐後に懷妊が発覚し出家したので、海女は尼を掛けていますが、中納言がそれに気づかないとする筋立なので、日本に残された大君

が恋しいあまり涙の海に身を沈めるほど嘆くのは誰のせいかと単に問いかけた、と受け取る。」(五二頁)と注されているとおりである。

まずはこの歌を検討することから始めたい。

「たれにより」を初句にもつ歌はさほど多くはない。例えば、源氏物語・濤標巻で源氏が帰京後、明石の君のことを初めて紫の上に語る場面で、紫の上の恨めしい気持ちを籠めた歌にこたえて、

誰により世をうみやまに行きめぐり絶えぬ涙にうきしづむ身ぞ

(『日本古典文学全集』・(二)―二八三頁)

という歌を詠みかける場面がある。「誰により」というのは単純な疑問ではなく、源氏物語の『全集』頭注が指摘するように「誰により……身ぞ」の強い反語的表現の構成であつて、他でもないまさにあなた、その人なのだという意味合いが強く押し出されるニュアンスをもっている語句である。拾遺集・卷十六・雑春・右衛門督公任の歌(二〇二二)、「誰により松をも引かん鶯の初ねかひなき今日にもある哉」は、詞書にある「東三条院御四十九日のうちに子日いできたりけるに、宮の君といひける人の許に遣はしける」ということから明らかのように、東三条院詮子が亡くなり、その忌中の初子の日の感慨を詠んだもので、「誰により」といつているのも、他でもないまさに詮子その人に寄せて子日の松を引くことの虚しさを訴えているのである。続古今和歌集・卷十一・恋一・みつねの歌(九四五)、「たれによりおもひみだるるころぞとしらぬぞ人のつらさなりける」(古今六帖・万代集にもあり)も同様に解されるのである。自らの心を婉曲的に表出し、「誰」の言外には目指す人以外をさすものでないという強い気持ちを表現しているのである。斎宮女御集(二二六)に「さだめなきよをきくときもたれによりながめがしはのしげきとかしる」とあ

る歌の「たれにより」の背景は、その詞書が記すように「堀河の中宮」(円融院の皇后藤原皇子)が亡くなつて後、作者の従姉妹である「六条殿」(源重信の妻)に「皇子が三十三歳という若さで崩じたので、その思いを深くし」ていることで、そこに、「誰のためにこんな嘆きをするのかごんじですか」というのは、ほかならず、あなたのお嘆きを思えばこそだとの気持ちを含んだ甲問「平安文学輪読会編『齋宮女御集注釈』二四四・二四五頁」の意が籠められていと説かれているのである。その他の「たれにより」の句をもつ歌についても、そこに共通している意味合いは、単なる疑問の形ではなく、それを通して、誰でもない、他ならぬあなたであるということ強く押し出す意図を表現していることが多いと分かるのである。浜松の「誰により……」の歌も、まさにその典型であり、大君からみれば、当然中納言その人をさして強く訴えられたものと解してよいと思われる。

「涙の海」も同様に歌に詠まれている。しかし、勅撰集には「涙のあめ」「涙のいろ」「涙のかは」「涙のたま」などはよく詠まれてはいるものの、「涙の海」はほとんど詠まれていず、それ以外の私家集などにはまま見ることができ。例えば、好忠集(四四二)の「ひとこふるなみだのうみにしづみつつ水のあはとぞおもひきえぬる」(伝為相筆本には「なみたのふち」とある)は恋人への絶望的な思いを詠んでいるのである。また、待賢門院堀河の私家集(待賢門院堀河集・一二三)の「これやさはふねながしたるあまならんなみだのうみによるかたもなし」は前後の歌の配置からみるとどうも出家をした人との別れを詠んでいる(「あま」が「厄」を掛けているか)とも受け取れる歌であり、よしんばそうでなくとも下の句からそのように理解はできるものである。また、狭衣物語・卷一「舵緒絶え命も絶ゆと知らせばや涙の海に沈む舟人」の歌は、投身しようと嘆く飛鳥井姫の心を詠む歌である。とはすがたりの「わが袖の涙の海よ三瀬河に流れて通へ影をだに見ん」(六六)、「する墨は涙の海に入りぬとも流れん末に逢ふ瀬あらせよ」(二五一)もある。和歌には「涙の海」に「沈む」「入る」「漕ぐ」、あるいは狭衣物語と同じ「舵緒たえ」などという語句

が用いられている。これらから、「涙の海」を読み込む場合には絶望的な心情が背景にあり、それを象徴的に表現するのが「涙の海」という語句であろうという推測が可能のように思えてくるのである。実材卿母集の歌「あすからはあすのあふせをまちわびて涙のうみになどしづみけむ」の歌についても、拙著では中納言と唐后との恋をもとに詠まれているのではないかと解した（『平安末期物語攷』第一章「権中納言実材母集と浜松中納言物語」・八三頁）が、題名との関わりからみて、恋の成就が絶望的になった大君の歌の鍵語「涙の海」を意識して詠まれたものと解することが、あるいは適切なのかも知れない。

なお、付言するならば、結句末に「とか知る」を用いる歌も多くはなく、浜松にもう一首「思ひわびあらじと思ふ世なれどもたれゆゑとまる心とか知る」（巻四）とある他、近世和歌に三首あるのみで、修辭的にも注意されよう。

このようにみえてくると、題名を導き出す大君の歌には巧みな表現方法が織り込まれていて、その修辭の背景を探ることによつてあらためて大君の深い絶望と虚しい呼びかけの心を確認することができるのである。このことは大君の歌に応えるかたちで詠まれた中納言の歌にも当然、然るべき詠出方法が潜んでいるとの推測を及ぼすことになり、浜松の題名に繋がったことの事由についても意味のないことではないと思われてくる。

(二) 中納言の歌について

中納言の歌は前二句は人物をさし、「こよひこそ」は時間を、「われを恋ふらし夢に見えつれ」はこの歌の重点である中納言の思いを、それぞれさしている。

まず、「我を恋ふらし」についてみておく。

「我を恋ふらし」の句をもつ歌もさほど多くない。新編国歌大観CD-ROMで見ると、十一件中六件が伊勢物語の六十三段（つくも髪）の「ももとせにひととせたらぬつくも髪我を恋ふらし夢に見えつれ」とそれを引く歌論書などであり、残り五件中三件が浜松の歌（浜松、後百番歌合、風葉集）で、あとは長能集の「みやこ人われをこふらしくさまくら我がたびねのゆめ見さわがし」と、古今注の「我をこふらし宇治の橋姫」の二首であることがわかる。

伊勢物語の後世における影響を網羅的に研究をすすめられている伊藤颯夫氏の『伊勢物語の享受に関する研究 第二巻』では、伊勢物語の「我を恋ふらし面影に見ゆ」と浜松の「我を恋ふらし夢に見えつれ」には「なんらかの交渉がありはしないかと思われるのである。一応、引歌と考えるが、不安がないわけでもない。」（二三七頁）と述べておられる。伊藤氏の見解を受け、これをさらに積極的に支持して、伊勢物語のつくも髪を浜松が承け、それを発想の背景として取り込んでいるのではないかと捉えるといかがであろうか。伊勢物語の場合は「老恋」の歌とも、また子が老母を恋い思ふ類の歌ともいわれる。竹岡正夫氏『伊勢物語全評釈』は六百番歌合にも「老恋」の部立のあることを例歌をあげて指摘する一方で、「子が老母を恋い思ふ類の歌」の例として「万葉集の防人の、国に残して来た父母を恋う歌」の「月日は過ぐは行けども母父が玉の姿は忘れせなふも」（四三七八）を示されている。悠かな異郷にいる父母を思慕するという発想は浜松と重なるものである。「老恋」という面があまりに強く意識されすぎたために、そこに隠れた意味を見失いがちになるのではないか。竹岡氏は次のように述べておられる。

この段も、「百歳に一年足らぬつくも髪」という「老恋」（あるいは老母を恋う）の歌と、古今集・古今和歌六帖にも収められて有名な「さむしろに衣かたしき」の宇治の橋姫の歌とをいかに巧みにデフォルメして見せるかに、この段の作者のねらいがあったのであろうと思われる。

（九二六頁）

古今集の歌は巻十四・恋四（六八九）の「さむしろに衣かたしき今宵もや我を待つらむ宇治のはしひめ」であり、古今和歌六帖（五・四六五）には「家刀自を思ふ」とする題でこの歌が入っている。「家刀自を思ふ」歌となると、これは浜松における中納言と大君との関係と重なり、同じ設定で詠まれたものとみることができるのである。

ところで、浜松全体を物語の展開に即して細かく検討する島内景二氏『源氏・後期物語話型論』では「日本の本のみつのはままつ……」について、この歌が古今集「さむしろに衣かたしき今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」と酷似し、この歌の基底にある橋姫伝承が浜松に取り込まれているのであろうと述べられた（三五〇～三五二頁）。つまり、大君と唐后とが中納言にとっての二人妻であり、本妻が大君、後妻が唐后に当るとみ、さらに、古今歌と中納言の歌が類似しているのは、大君と唐后とが中納言にとって二人妻であることを語るためであると説かれたのである。浜松の構想に橋姫伝承、二人妻伝承が関わっていることを述べられたことは一考に値するものであろう。ただ、二人妻という設定は必ずしも大君と唐后に限定されることなく、大君と吉野姫君、あるいは唐后と吉野姫君の関係にも、考え方によっては相当し得るようであることから、むしろ橋姫伝承の方により濃い影響関係があるとみるべきだろうと思われる。いったいに重層的な影響関係を単一な説話概念で把握することは困難ではある。いま問題としている浜松の中納言の歌にしても橋姫伝承の発想にはよりながらも、歌の表現上の語句使用からいえばあきらかに伊勢物語第六十三段のつくも髪伝承にみえる「ももとせにひととせ足らぬつくも髪我を恋ふらし夢にみえつれ」に基づいているのである。伊勢物語の歌の「九十九歳の女」というところを「恋人を待ち続ける日本の女」に置き換えてみると浜松の歌になる。こう考えると伊藤氏のさきの指摘はまことに適切なものであったといえるのである。¹⁾

「我を恋ふらし」をもつもう一例の長能集（二〇）の歌についてみておこう。詞書は「ゆめみさわがし、とてよめる」とあり、この歌が「夢見が穩かでなかつた、というので、よんだ歌」という設定で詠まれている。平安文学輪読会編『長能集注釈』は「ゆめみさわがし」について、「不吉な夢、不安な夢を見たことをいうように考えられるが、

ここは歌から判るように、それほど深刻な夢というわけではない。」(二二頁)と説かれ、肝心の歌については、「丹波国の田舎にいる自分に對して都にいる人、恐らくは都の女性、恋人をさすのであろう。『ゆめみ』は、具体的な内容は判らないが、気になるような内容の夢、普通ではない夢を見たのであろう。古代人は、ある人が夢の中に現れた場合、それはその人が自分を恋い求めているからであると考えていたことは、万葉集以来多くの例がある。『われをこふらし』は、伊勢物語六三段の『百歳に一歳たらぬつくも髪我を恋ふらしおもかげに見ゆ』によつた語と考えられる。」(二二頁)と述べて、明確に伊勢物語つくも髪伝承との関係の存在を注記している。

このようにみてくれば、浜松のこの歌もやはり伊勢物語六十三段の強い影響下にあり、またそれを意識しつつ詠まれていると捉えるのがまずは穏当な考えではなからうか。歌の鍵語である「つくも髪」という語も平安期の物語にはほとんど見られず、源氏物語・手習巻にわずかに一例(「一年たらぬつくも髪多かる所にて」)あるのみで、和歌にも多くはない。「つくも髪」には伊勢物語のイメージが色濃く織り込まれているとみてもよからう。大雑把にまとめれば、伊勢物語の老女の夢語りの発想をすこしずらせば、若い女が出家をする話に、さらに出家後に在俗中の恋人を慕つて夢告げをするという設定に再生される可能性の過程は、さほどの隘路とは思えないようでもある。冒険ついでに付加するならば、さきにあげた長能集の歌は、道綱母と長能とは異母姉弟ではないかと言われており、仮に浜松の作者が孝標女とするならば血縁関係がまったく無いわけではなく、むしろ縁者としての近しい意識が作歌の際にも働いていたともとれなくはないようであり、他にあまり多く用いられていない語句を物語の主題の歌として導入する可能性、あるいは親近性などが潜んでいたのではないかと推測できる余地があるようである。

さきに石川徹氏の見解として、伊勢物語のいわゆる葦刈伝説に係る二首の「みつの尼」が題名にヒントを与えたのではないかとの説を紹介した。石川氏の見解とこのつくも髪の歌との関わりとをみると、浜松には伊勢物語からの影響がやはり少なからずあつたとみてもいいのではないかと思える。発想においても表現の面においても前代の作品の

影響が濃くあるとみるのは自然で、しかも浜松のような新奇な構想においてこそ物語の深層に、依拠すべき骨格の大きい伝承が重層しながら存在していたと考えることは許されるのではあるまいか。

(四) 為家と浜松との関わり

次に「夢に見えつれ」に着目してみる。これと同じ句をもつ歌はきわめて少ない。新編国歌大観のCD-ROMで見ると、五件の該当歌があるが、そのうち三件は浜松のこの歌と、これをおさめる後百番歌合、風葉集の歌である。残る二首は為家集と法性寺為信集からのものである。法性寺為信集のは「せめて猶まどろむ程もわすられぬつらさのみこそ夢に見えつれ」(三〇三)とある歌で、「恋歌の中に」と題する五首の中の一首であるように、逢えぬ恋人の嘆いている様子を夢に見たと詠む恋歌である。また、為家集の歌は「いかにぞとおもひやすらん今夜こそ故郷人の夢にみえつれ」(二七九二)というもので、歌の趣向としては、自己の苦衷に拘泥することを主眼とする法性寺為信集のよりも、いっそう浜松の歌に近いものであるといえる。故郷を離れたところで恋しい人に思いを馳せていると、何と、今夜、その恋しい人を夢に見たというのである。「故郷人」は夢路を辿って来て我が夢枕にやってきたのである。しかとその内実は分明ではないものの、夢枕にたつことよって熱い思いは伝わってきたのであって、長い隔たりを越えて、夢によっていっそう恋しさはまさったというのであろう。大久保広行氏は、今日の「夢を見る」に相当する表現は万葉集においては「夢に見ゆ」(「夢に見る」)であることについて、「夢の対象を主語とする単純な構文をとるもので、夢を自然発生的な神秘靈妙なものとする観念が反映していると思われる」(「国文学」昭和四七・六)と述べておられる。しかも「夢に見ゆ」は必ずしも万葉集の修辭にのみとどまらず、和歌の類型的表現として定着することになる。大久保氏の言い方を援用するならば、浜松の「日の本の」の歌は「日の本の御津の浜松」が主語であつ

て、それが夢枕に立つという解が成り立つ。中納言は、自分の夢枕に今夜、「御津の浜松」が立ったがゆえに、遠い異郷にいる自分を恋しく思っているのであるうと思いが当るのであった。日本を離れ、大君とも別れ、多くの日数を経、今日に限って大君の夢を見たのである。日は多くあったのに、他の日でなく、まさに今夜、大君の姿を見、彼女自らが話し掛けるかのように思えたのであった。そのような設定での中納言の歌であったのである。「故郷人の夢にみえつれ」とする為家集の歌はまさにこの浜松中納言物語の中納言と大君の交感にそのまま当てはまるとみてもよさそうである。

歌一首の類似から類推を拡散させていく傾きを警戒はしつつも、なおもう一言付加しておきたいことがある。それはこの為家という人物のことである。藤原為家は藤原定家の嫡男で続古今和歌集などの編纂に当たった歌人。さらには物語歌集である風葉集の撰者でもあったのである。そもそも為家も定家同様、物語にも関心が深かったことは言うまでもない。さらに憶測を逞しくするならば、この為家の歌は、表面は単なる故郷人恋しさの思いを詠んではいるものの、その背景として物語の世界、浜松の物語的世界を、そして浜松の題名の源となった歌に注目していたからこそこの詠ではなかったかと思えるのである。

おわりに

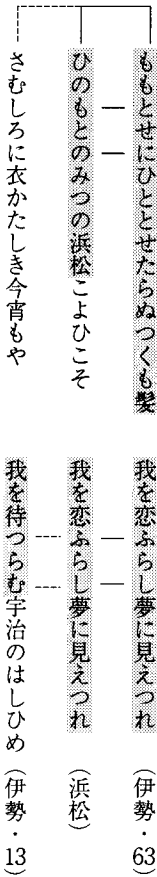
このように、浜松の題名について考えてみると、なおまだ考察の余地がありそうに思えてくる。物語中の歌と場面とを子細に検討する過程で多くの読み残しがあることであろう。浜松中納言物語の元題は中納言の詠んだ歌にある「みつのはままつ」に本源があり、後に「浜松中納言」や「浜松中納言物語」になつていると説くことはまったく正しい。ただ、それが物語の展開のなかで、また、広く物語史の流れのなかでいかなる背景のなかから生み出され、ど

のように受け取られていったのかは、もう少し慎重にみていかねばならない課題であるように思われる。

注

(1) 小考の要点を図示すれば次のようになろう。

(伊勢物語) 「つくも髪」の夢語り↓「我を恋ふらし」↓(浜松) 尼となった大君の夢告げ



なお、辛島正雄氏は「女中納言と「宇治」——「今とりかへばや」における〈二人妻説話〉の影——」(『国語と国文学』平成十四年五月特集号)において「今とりかへばや」に「二人妻説話」の面影のあることを指摘されている。その依つてきたるものとして散逸物語「橋姫の物語」があるという。これを浜松に応用し、二人妻を大君と唐后とみると次のようになる。物語の古層に共通する何者かがありそうに思えてくる。

橋姫の物語		浜松中納言物語	
I	二人妻の話である	大君と唐后	
II	本の妻は夫の子を生む	大君は女兒を生む	
III	夫は龍王の婿となり、妻たちと幽明処を隔てる	中納言は唐后と契り、唐土に三年いる	
IV	本の妻が「宇治の橋姫」と呼ばれる	本の妻(大君)は「みつの浜松」と呼ばれる	